中山道柏原宿やいと祭［山東町］

柏原宿は、中山道67宿のうち60番目の宿場で、宿の長さは東西十三町（1.4 km）、戸数344 軒とこの近辺では大きな宿場であったようです。

宿には、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋22軒、そして柏原宿名物の“もぐさ”を商った十数軒のもぐさが軒を並べ、なかなか賑わった街道筋だったようです。

こうした山東町に多くの文化をもたらしてきた“中山道柏原宿”にスポットを当て、町並みや景観をはじめとした歴史遺産を生かしながら、まちづくりを展開しているところです。

そうした中、地元で柏原に往時の宿場の賑わいを。そんな思いが結集して、「やいと祭」が始まりました。今年は「人・風・心をつなぐ柏原宿」をテーマに、7月24日（土）・25日（日）の2日間にわたって開かれます。24日は前夜祭、25日には街道筋に模擬店が並び、マーティングバンドや観光人力車が繰り出します。そして、各所でやいとの実演、写生大会、柏原宿歴史館での歴史展示など硬軟織り混ぜた盛り沢山の催しが行われます。

こうした祭りを通した地元の盛り上がりの中で、町並み保存等を含めた柏原の未来像を共に考えていきたいと思います。（桂田峰男）

「やいと祭り」のにぎわい

情報ＢＯＸ

◆米原町では下記の図書を刊行いたしました。
『米原町史　資料編』
◎問い合わせ先
米原町役場　企画調整課
☎０７４９（５２）－１５５１
『松尾寺遺跡発掘調査報告書』
『ハリヨ生態調査報告書』
◎問い合わせ先
米原町教育委員会　社会教育課
☎０７４９（５２）－１５５１

◆伊吹町では下記の図書を刊行いたしました。
『伊吹山文化資料館年報１』（平成10年度）
※遺跡模型の作り方も紹介しています。
◎問い合わせ先
伊吹山文化資料館
☎０７４９（５８）－０２５２

◆伊吹山文化資料館企画展示のおしらせ
「伊吹の戦争と平和展’99」
8月7日～8月29日
「夏の宝物～ぼくたちの作った標本展」
9月上旬
◎問い合わせ先
同　上

◆柏原宿歴史館からのお知らせ
「説教浄瑠璃を鑑賞する会」
－小栗判官・照手姫の車引きの段－
8月8日(日)　午後4時～5時
◎問い合わせ先
柏原宿歴史館 ☎０７４９（５７）－８０２０

◆◆編集後期◆◆

『佐加太』第10号をお届けします▶毎回、刊行が危ぶまれながらも、めでたく二桁台にたどりつきました。これも、ひとえに愛読者の皆様のご声援のおかげと、坂田郡文化財担当者一同、感謝の気持ちで一杯です。昨年も、郡社会教育研究会文化財部会で、奈良県高取町さんにお邪魔したとき「あの『佐加太』の…」といっていただき、嬉しかったことを思い出します▶本誌は、北は北海道から南は沖縄県まで、全国の関係機関に送らせていただいていますが、逆に、各地からの文化財の便りを坂田郡四町に届けていただき、郡の文化財保護行政のレベルアップに貴重な資料として活用させていただいてます▶東は、岐阜県との県境・伊吹山地の山間部から、西は、琵琶湖辺まで、狭いようで広い坂田郡にはまだまだいろいろな文化財があります▶これからも、坂田郡のキャッチフレーズ「東西文化の交差点」どおり、西へ東へ情報発信をつづけます。（の）

坂田郡文化財ニュース
佐　加　太　第10号
発　行　平成11年8月10日
編　集　坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局　〒521-0314　滋賀県坂田郡伊吹町春照37
伊吹町教育委員会生涯学習課
TEL. 0749(58)1121
印　刷　立木印刷

第10号
１９９９年8月１０日
滋賀県坂田郡社会教育研究会
文　化　財　部　会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

近江町はにわ館がオープン　［近江町］

本年4月18日（日）、滋賀県坂田郡近江町顔戸（ごうど）に「近江町はにわ館」がオープンしました。これまでも情報誌『佐加太』の中で、たびたび紹介しましたが、近江町には「息長古墳群」と呼ばれる前方後円墳を中心とした中後期古墳群が存在し、貴重な考古資料「形象埴輪」が多数出土しています。近江町はにわ館では、これらの形象埴輪を題材に、子ども達に親しんでもらえる施設運営をめざしています。

これまで息長古墳群出土の埴輪は、滋賀県内外の博物館・資料館施設に貸し出される機会が多くありました。しかしながら、その一方で、地元には資料館等の公開施設がなく、町民への公開普及活動に支障をきたしているのが現状でした。

新しく生まれた近江町はにわ館は、近江町立図書館との併設による複合施設。かたりべホール（視聴覚メディアホール）、地域情報室（地域文化をテーマにした企画展示室）、はにわミュージアム（常設展示室）の3つから構成されており、今までにない新しい形のコミュニティー施設となっています。

なかでも、常設展示室となっているはにわミュージアムでは、謎の考古学者「息長博士」が登場し、自説の『古墳タイムマシン説』を実証しながら、1,500 年前の近江町にタイムワープして「埴輪の製作方法」「古墳の築造」「墳丘祭祀」等をモバイル通信で伝えてくれます。博士の持論は、「もっと埴輪をよく触って学習しろ」というもの。館内の展示も「ハンズ・オン」と呼ばれる体感型展示を中心に設定しており、ガラスケースを一切用いず、資料には自由に触れることができ、写真撮影もフリーになっています。

またハンズ・オンの展示に続いては、イマジネーションの領域を広げるコンピュータの疑似体験ゲーム「バーチャル・ミュージアム」を設置しています。ここでは、「はにわ復元ゲーム」「物知りクイズ」など4種類のＯＡゲームを開発し、自由開放しています。

今までにない形の文化施設「近江町はにわ館」に是非一度お越しください。（宮崎幹也）

入場無料
開館時間：午前10時～午後6時
休 館 日：月曜日・火曜日・祝日・月末木曜日
お問合せ：近江町立図書館・近江町はにわ館
住　　所：〒521-0072 滋賀県坂田郡近江町顔戸281-1
ＴＥＬ 0749-52-5246　ＦＡＸ 0749-52-8177

はにわミュージアム（常設展示室）

坂田郡の遺跡案内

中世山岳寺院編

坂田郡には伊吹山(1377m)と霊仙山(1084m)という県下でも有数の標高の高い山があります。この二つの山は古来より様々な形で人々の信仰の対象になってきました。特に奈良時代以降は山岳仏教における修験地として数多くの山岳寺院が建立されました。伊吹山については、弥高寺・太平寺・長尾寺・観音寺(鎌倉時代に山東町大原に移転)等が、また霊仙山に関しては霊仙寺とそれを取り巻く周辺地域に霊仙七ケ寺(郡内では米原町上丹生の松尾寺)が次々と建立されていきました。中世段階に入ると、それまで信仰の場であり修験の場であった山岳寺院も質的な変容を遂げます。中でも典型的なものとして、弥高寺や太平寺に見られる寺院の城塞化があります。これらの寺が城郭として再整備されていく背景には、この地域の在地領主である京極氏が在地支配を強め、六角氏等の勢力に対する防御施設を構える必要性があったと考えられます。

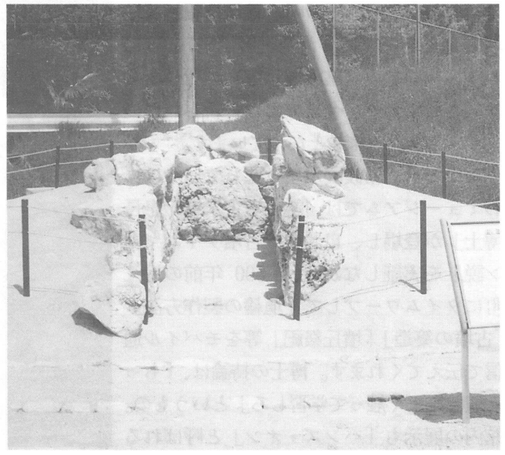
坂田郡に花開いた山岳仏教文化も、その後の歴史の流れに翻弄されながら、あるものは廃絶し、またあるものは姿形を変え現在に至っています。変わらないのは伊吹山と霊仙山の豊かな自然だけなのかもしれません。　(土井一行)

ミミ塚古墳石室を復元しました　[伊吹町]

伊吹町の『遺跡地図』を開きます。いちばん目につくのは、縄文遺跡の23ヵ所。県内でも縄文遺跡が多い町です。しかし、古墳は昨年までたったの1ヵ所。大正時代に整地されてしまった1基だけでした。平成10年、縄文時代の人塚遺跡の調査で、6世紀末から7世紀の古墳が2基発掘されました。町内では初めての貴重な古墳の調査(調査は県協会)です。さいわい2基とも、予想以上に石室や遺物の残りがよく、このうちの1基「ミミ塚古墳」の石室を、伊吹山文化資料館の広場に移築しました。郡内では初めての試みで、これから子ども達の歴史学習の資料に活用します。

復元作業は町内の石屋さんに依頼しました。あらかじめ解体する際に、100点をこえる石室を構成する石に内外、上下を記入していただきました。1点1点クレーンで吊り上げながら、写真と実測図をみくらべ元の位置に据えていきます。石材は伊吹山のもろい石灰岩。石屋さんは古墳の復元など初めての経験で、どれだけの手間がいるのか皆目わからなかったようです。可能な限り出土状況に近づける。一般に公開することから安全性に考慮する。この2点を基本方針に、見事に組みあがりました。

(高橋順之)


復元された石室

須恵器四兄弟　[山東町]

山東町の西辺、長浜市との境を画する横山丘陵の斜面に位置する菅江遺跡は、昭和61年度の発掘調査で奈良時代の須恵器を焼成していた遺跡であることが判明しました。

調査では、土器を焼いていた窯跡1基と灰や焼き損じなどを投棄した灰原を2ヵ所確認しました。

焼かれていたものはそのほとんどが小型品ですが、杯身、蓋、甕、長頸壺、平瓶、環状瓶、鉢、皿などバラエティーに富んだ種類の土器が多量に出土しました。

その中で今回紹介します、熔着品は、試掘調査の段階で出土したものです。口径17cmほどの蓋と有台杯身が4個体積み重なっており、蓋は杯身の上に裏返しにして焼かれていたようです。また、蓋と杯身の間には擬宝珠様のつまみと思われるものをはさんで重ならないようにしていたようです。窯跡から出土するものは、いわゆる製品にならなかった失敗作品ですが、当時の焼成技術を知る上で、大切な情報を教えてくれます。　(桂田峰男)

熔着品

鎌刃城跡の調査(その1)　[米原町]

「佐加太」第5号で紹介しました米原町番場に所在する戦国時代の山城、鎌刃城跡の発掘調査が平成10年度から始まりました。

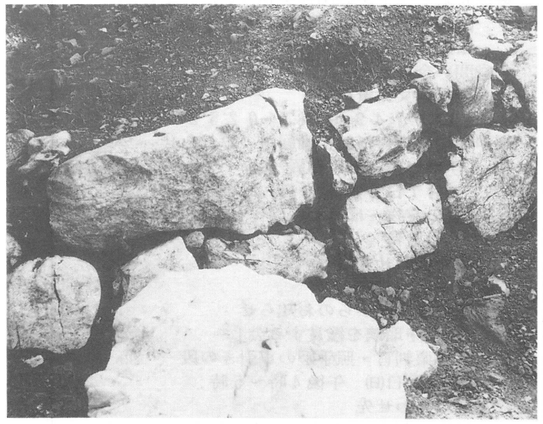
10年度の調査は城跡の北端に位置する曲輪と虎口で実施され、曲輪からは1間を6尺5寸とする5間×3間以上(5間か)の礎石建物が検出されました。端部の礎石は土塁直下に据えられており、土塁が建物の壁面として利用された、半地下式構造の建物であったことが判明しました。建物跡からは多量の鉄釘が出土しており、特にその長さが1寸5分ほどの小さな釘ばかりで、建物の床張りに使用されたものと考えられます。

戦国時代の山城で、しかも中心部ではない場所からこうした大形の礎石建物が検出されることは稀な例であり、今後の中世城館跡研究で注目される遺構と言えそうです。

虎口は調査の結果、6×6mの枡形虎口であることが確認できました。その構造は枡形の側面が半分までが石垣となり、残り奥行部分3方が3～5段の石段となる特異なものでした。正面に門柱の礎石が検出されていますので、門が存在したことはまちがいありませんが、門を入ると折れ曲がらず、3方ともに城内に出入りが可能となり、枡形とはいうものの、平虎口に近い形状となります。

この枡形虎口のすぐ横からは礎石建物へ出入りする通路も検出されつつあります。半間ほどの狭い通路ですが両側面を石垣としており、まるで横穴式石室のようです。この通路は平成11年度の夏に本格的な調査を実施する予定ですので、その成果にご期待下さい。

出土遺物は多量の鉄釘をはじめ、中国製の端反り白磁皿、瀬戸美濃の天目茶碗、備前の大甕、土師器皿などがあり、いずれも16世紀第3四半期頃のもので、今回検出された遺構が浅井氏時代の技術であることが明らかとなりました。　(中井　均)


虎口側面の石垣